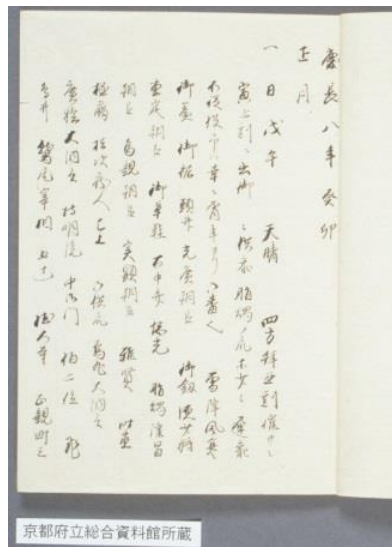


宮中祭祀と『時慶卿記』

宮中の一年は元日の朝 5 時 30 分に行われる四方拝（しほうはい）という祭祀から始まります。時の天皇が伊勢神宮をはじめとして、神武天皇と前三代の山陵、賀茂別雷（かもわけいかづち）神社（上賀茂神社）、賀茂御祖（かもみおや）神社（下鴨神社）などの諸神を拝します。この儀式は平安時代に起源があり、その形態を変えながら今日に伝わっています。

安土桃山時代から江戸時代にかけてもこの儀式がありました。西洞院時慶（にしのとしいん ときよし）という公家の日記にも正月の四方拝の記述があります。例えば、慶長 8 年（1603）元旦には「一日午戌 天晴 四方拝丑刻催サレ 寅上刻二出御」とあり、後陽成天皇による四方拝のことが書かれています。寅上刻（午前 3 時台）という記述から現代同様、早朝よりこの儀式が行われていたことがわかります。時慶はこのほかの祭祀についても日記に書きとめ、当時の宮中の様子を垣間見ることができます。



また、時慶は天皇に近かったことに加え、歌人や医者としても活躍し、徳川家の重臣や秀吉の正室高台院などとも関わりがありました。彼の日記にはこれらの人々とのやりとりも数多く登場し、当時の政治情勢を知るための貴重な一次史料という評価を得ています。この日記は『時慶卿記』または『時慶記』と呼ばれています。当館には『[時慶卿記](#)』の名で江戸時代中期の写本が伝わり、当時の状況を探究するテレビ番組でもしばしば利用されています。

(2017年3月15日公開)